

中山道宿場町探訪 第6回熱田宮ノ宿・熱田神宮

2025 年 10 月 4 日土曜日 9 時 00 分に「名鉄岐阜駅」の待合室に 4 人が集合しました。そして、名鉄特急で「名鉄金山駅」に向かい、地下鉄名城線に乗り換え「熱田神宮西」で下車しました。今年は例年になく猛暑日が続き、10 月に入ってやっと少し涼しくなりました。今日はあいにくの雨模様で「熱田宮宿」までどうやって行って良いのか？ 道路案内板を見て迷っていました。とにかく、タクシーを拾って分乗しました。ほんの 10 分もしない内に、「七里の渡し」の常夜灯が見えて来ました。

## ① 熱田宮宿の探訪

熱田宿(宮宿)は、東海道五十三次の41番目の宿場です。この宿場は愛知県名古屋市熱田区に位置し、熱田神宮の門前町としても栄えました。東海道最大規模の宿場町であり、海路「七里の渡し」で桑名宿と結ばれていました。

これまで探訪してきた美濃太田宿・鵜沼宿・加納宿は中山道(なかせんどう)の宿であり、この街道は江戸時代の五街道のひとつで、江戸(東京)から京都までを結んでおり、岐阜県の山間部や河川敷を通る内陸ルートでした。一方で東海道(とうかいどう)は、海沿いを通り、両者は目的地が同じでも経路が大きく異なっていました。中山道は山岳地帯を通るため、峠越えが多く交通の難所が多かった一方、天候の影響を受けにくく、冬季でも比較的通行可能でした。これら二つの街道を結ぶ脇街道は、熱田宿から垂井宿までを「美濃路」と呼んでいました。これまで竹鼻・墨俣宿、大垣宿を探訪して来たので、今回は両街道の結接地となった熱田宿を探訪しました。



七里の渡しの常夜灯



美濃路は、尾張藩が整備した重要なルートでした。特に熱田湊(あつたみなと)は「七里の渡し」の東の拠点であり、跡地には常夜灯が残り、往時の面影を伝えています。東海道は海沿いの平坦な道が多く、交通の便は良いが、雨や台風の影響を受けやすいという特徴がありました。熱田宿に在る常夜灯は「闇夜に船が着岸するための目印」として設置されました。海路の重要な出発点だったため、夜間の安全確保が必要でした。熱田宿は将軍から庶民までが逗留する総合宿泊拠点であり、常夜灯と旅籠はその繁栄を象徴する存在でした。一方で熱田は熱田神宮の門前町として栄え、句会や舟遊びなども盛んに行われていました。名古屋市熱田区の「宮の渡し公園」には松尾芭蕉の句碑や看板が設置されており、彼がこの地を訪れたことを示しています。芭蕉はあちらこちらを旅していた事に改めて驚きました。



熱田宿は東海道五十三次の中でも最大規模を誇り、江戸時代には旅籠屋が 248 軒も軒を連ねていました。代表的な旅籠「伊勢久」は、創建が 19 世紀前半とされ、江戸末期の地誌『尾張名所図会』にも描かれています。屋号は「伊勢屋久兵衛門」に由来し、脇本陣格の旅籠として長府藩・大村藩・土佐藩などの定宿でした。明治以降は旅館や下宿屋、戦時中は男子寮、戦後は臨時教室など多用途に使われました。その後、この旅籠屋「伊勢久」は、丹羽家の代替わりに際して相続人から名古屋市文化財保護室に相談の連絡があった事で存続問題が表面化しました。相談の内容は、老朽化が著しいため維持・改修が難しいが、先代が守ってきた文化財であり、市民の財産



でもあるので名古屋市で取得する等の対応を検討してほしいという旨だったといいます。現在は名古屋市指定文化財であり、保存活用のために移築・改修が進められています。



「熱田ぐるりんマップ」より

## ② 熱田神宮の参拝

熱田神宮の縁起は、景行天皇 43 年(西暦 113 年頃)に創祀されたと伝えられています。創建は仲哀天皇元年(192 年)または大化 2 年(646 年)ともされ、諸説あります。主祭神「熱田大神」は、三種の神器のひとつ「草薙剣」を御霊代とする神格です。草薙剣は、素盞鳴尊(すさのおのみこと)がヤマタノオロチを退治した際にその尾から得た剣で、天照大神に献上されたとされます。日本武尊(やまとたけるのみこと)が、東征の際に草薙剣を携えて活躍し、最終的に妃・宮簀媛命(みやすひめのみこと)に剣を託しました。宮簀媛命が熱田の地に剣を祀ったことが、熱田神宮の始まりとされています。



熱田神宮本殿

熱田神宮に残っている「信長塀(のぶながべい)」は、まさに織田信長と深い関係があります。桶狭間の戦いの直前、織田信長は熱田神宮で戦勝祈願を行ったという逸話が残っています。出陣前夜の信長は軍議を早々に切り上げ、家臣たちを帰させます。これは情報漏洩を防ぐためだったとも言われています。永禄 3 年(1560 年)の出陣当日(午前 3 時頃)に信長は、幸若舞『敦盛』を舞い、「人間五十年…」の名台詞を口ずさみながら出陣します。その途中(午前 8 時頃)、熱田神宮に到着し、神前で戦勝を祈願しました。願文を読み上げると、神殿の奥では鎧の音が響き、兵士たちは士気を高めました。祈願の後、一羽の白鷺が飛び立ち、神の兆しは「吉兆」と受け取り、兵士はさらに鼓舞しました。その祈願が成就して今川義元を討ち取った後、信長は感謝の印として築地塀(ついじべい)を奉納しました。この塀が「信長塀」と呼ばれていて、土と石灰を油で練り固め、瓦を厚く積み重ねた構造になっています。このエピソード



ードは、信長がただの合理主義者ではなく、神仏への敬意や戦略的演出も重視していたことが伺えます。

当初は全長 400 メートルもあった「信長塀」は現在約 120 メートルが残っていて、日本三大土塀のひとつに挙げられています。



↑信長塀      宝物館⇒



## 日本三大塀

○信長塀: 愛知県名古屋市の熱田神宮に在り、織田信長が桶狭間の戦いの戦勝祈願の礼として奉納し、瓦と土を油で固めた構造が特徴です。

○太閤塀: 京都府京都市の三十三間堂に在り、豊臣秀吉(再建は秀頼)が方広寺造営の際に寄進し、木骨土造で版築仕上げが特徴です。

○大練塀(おおねりべい): 兵庫県西宮市の西宮神社に在り、室町時代に築かれたとされる、現存最古級の築地塀で版築技法で築かれてるのが特徴です。

熱田神宮には「宝物館」と「剣の宝庫 草薙館」の 2 つの展示施設があり、「宝物館」に入りました。展示内容は、崇敬者から寄進された約 6,000 点の品々を収蔵し、刀剣以外にも、彫刻、工芸品、古神宝、書跡などが展示されています。国宝 1 点、重要文化財約 107 点、県指定文化財も多数ありました。草薙剣にちなんで刀剣類を中

心に展示した「剣の宝庫 草薙館」もありましたが、時間の都合でこちらはパスしました。

### ③ 「ひつまぶし」発祥の蓬萊軒で昼食

名古屋市は文化財保護に当たり、七里の渡し周辺地域のまちづくりについて先に述べた「旅籠伊勢久」を含む保存活動でも理解が深く積極的に取り組んでいる企業として(株)蓬萊陣屋が大きな役割をしたことが分かりました。(株)蓬萊陣屋と言えは「うなぎの蓬萊軒」であり、名古屋メシの代表格である「ひつまぶし」のブランドリーダーです。誠に良いめぐり合わせで、名古屋の味と歴史を体感するため、昼食は奮発して「蓬萊軒のひつまぶし」としました。



女性は、案内役(名古屋市熱田区観光大使)の旭堂鱗林さんです

「ひつまぶし」は蓬萊軒が発祥とされる名古屋名物のひとつで、登録商標にもなっています。創業は明治6年(1873年)の老舗鰻料理店で、元々は熱田神宮の境内に料亭として創業し、神宮参拝客や旅人をもてなす場として発展しました。単なる食事処ではなく、文化的な体験の場でもあります。蓬萊軒の格式ある料理と接客に今も息づいています。伝統的な割烹・会席料理を提供しています。四季折々の食材を使った会席料理も提供されており、料亭文化の伝統を守り続けています。



炭火で焼き上げる鰻は、香ばしくふっくらとした食感が特徴です。細かく刻んだ鰻の蒲焼をご飯にまぶし、薬味や出汁で三通りの食べ方が楽しめる独特のスタイルです。この食べ方は、料亭で余った鰻を刻んでまぶしたことが始まりとされ、庶民にも親しまれるようになりました。

#### ④ あとがき

今回は、「大垣宿」⇒「墨俣宿・竹鼻」⇒「熱田宮の宿」へと中山道から東海道に繋がる美濃路を進み「熱田宿」の探訪となりました。これまで本陣・脇本陣と江戸時代の文化に触れてきましたが、「熱田宿」の様に大きな宿ではすべてを探訪が大変で、また名古屋の様に都市開発がすすんだ所は却って跡地の看板だけになっていました。「熱田神宮」への参拝や「名古屋名物ひつまぶし」発祥を訪ねることができ、大変有意義な探訪となりました。次回は、中山道に戻り「垂井宿」を探訪する予定だ。

(記録 第12期卒 坂井 至通)